

心光寺秋季彼岸会のご案内

*期 日 平成十四年九月十六日(月曜日・振替休日)

十七日(火曜日)

*時 間 十六日(昼席)午後一時三十分より (夜席)午後七時より

十七日(昼席)午後一時三十分より

*会 場 (昼席) 心光寺本堂 (夜席) 心光寺庫裏

*講 師 大石 法夫 先生(広島市在住)

心光寺からの便り

九月も半ば^{なか}近くとなり、由布の里では稲の穂が実り、採り^と入れの姿もちらほら見かけます。吹く風、空の色もすっかり秋の色をお^お帯びてきました。

さて、大石先生はお話の中でしばしば「白紙になる」ということを言われます。例えば、

「一ぺん如来を信じられたら、いつも業の中から



まつさらの**白紙**になって、浄土に向かって歩みが始まる。」

(平成十四年七月十日、村上道場にて)

或いは、

「念仏申させていただく時、『無始已来造りと造る悪業煩惱を^{あくごうぼんのう}残る所もなく願力不思議^{がんりき}をもて消滅する謂^{いわれ}あるがゆえに、正定聚不退^{しょうじょうじゆふたい}の位^{くらゐ}に住す……』(ご文章)となるのです。心が**白紙**になるのです。」

『許されて生きる』一八九頁)

そこで今月はこの「白紙になる」という言葉について、それがいったいどのような世界を私に教えて下さるのかお尋ねしてみたいと思います。

まずお話の中でこの「白紙になる」というお言葉に接したとき、そこに私はどのようなものを感じるかということについて述べます。

私はこのお言葉に、今まで自分の中で蓄積してきた人生観や主義、主張等々との訣別^{けつべつ}、その清算^{せいさん}、それからの解放。何かそういう方向を指し示して下さっていることを感じます。そしてそこに福音^{ふくいん}を、暗闇の中に差し込んでくる一条の光を感じるのです。

ではなぜそういうものを感じるのか。この点について、以下自分の歩みを振り返りながら考えてみたいと思います。

「物心つく」という言葉があります。辞書を引くと「子供が世の中の裏表や、デリケートな人間関係や人の気持ちなどについて分り始めること」とあります。それは子供の心の成長を表す言葉ですが、別な面からいうと、自我が成長し始めたことを表します。自我というのは、自分と自分以外の一切のものはつきり區別した上で成り立つ自意識のことです。従って自我が成長するということは、自分と自分以外の一切のものとの区別の意識、すなわち自分という枠^{わく}の意識が次第に明確になっていくことです。さらにこの自我と自我以外のものとの関係は、ちようど主人公とその食べ物の関係にたとえることができます。すなわち主人公は

自我で、それ以外の一切はその食べ物、すなわち自我の食欲を満たし、自らの体内に吸収して、自らを肥こえさせるためのものです。

私は物心ついて以来、私の周りまわのあらゆるものから物心両面にわたって様々なものを吸収し、〈私〉（＝自我）を大事に大事に太らせてきたのです。すなわち経験や学習を通じて、自分の考え、人生観、主義、主張、そういったものを形成してきました。仏法に対しても、そのようにして私が分ろうとする対象、或いは私の精神を豊かにする栄養物として、私の内に取り入れていこうとしてきたのです。

ここで、自我のそのような姿について具ぐに述べられた大石先生の言葉をご著書から引用してみましよう。

「きかせて貰もらい、うなずかせて貰もらっているうちに、うなずいておるのは誰かということに、即ち自力の我執がしゆうがうなずいておることに気づかされます。仏様の教えをきかせて貰もらっても、仏様の境地に導かれようとしなくて、仏様を自分の我執がしゆうの枠わくへ引きこもうとしておる。そういうきき方をしておる自分に気づかされず。信心を自分が作るのです。作った信心が、生きておる人間を救い得る筈はずがありません。」（『生まれてよかったですか』一一一〜一二二頁）

或いは、

「自分の存在を認めて欲しい心から、教えをきき、仏様の救済を求める。その心で何十年きいても分る筈はずがない。その心で仏教書を読むのですから、宗教とはこういうものだ、仏教はこうだと自分で勝手に作る。自分の教養程度にきいて信心者らしく振る舞う。」（『生まれてよかったですか』二〇五頁）

これは人のことを言われているではありません。いずれもご自身のたどってこられた心の軌跡きせきを、教えの光に照らされて、ありのままに省みられてのお言葉です。このような肺腑はいふをえぐるような師のお言葉に接するとき、教えに接す

る私自身の今の姿をくつきりと照らし出されます。

私は仏法を分ろう分ろうとしてきました。しかしよくよく考えてみると、そのあり方は、仏法より自分の方が上位に立ったあり方に外ならないのでした。なぜなら、何かを分かる、知るとは、分った内容、知られた内容より、分った私、知った私の方が大きいという関係にあるからです。

そのような私にとって、分らないもの、理解できないものが目の前にあることほど不安で不気味なことはありません。だからそのようなものに対しては、何とかして理解しようと試みます。それはそのものを支配しようとするのと同じことです。

このようにして私の分ること、知ることへの欲求は無際限に拡大していきます。それは例えば、宇宙の果てを知ろうとすることから、生命発生の意味を問うことまで、とどまることを知りません。それは基本的には、自分が宇宙や生命の創造者、すなわち神と同じ位置に立とうとしているのと同じことです。



夜の座談会で大石先生のお話に興味に耳を傾けるご同行の皆様方

(H14.8.16.心光寺定例聞法会にて)

このような思考の方向は、一面では人間が生きる意味を問う上で大変大事なものです。反面非常に危険な方向をもち込んでいます。なぜならこの方向をどこまで突き進めていっても、脈々として今ここに生きる命そのものへとたどり着くことは決していないからです。それどころか思考だけが一人歩きして空中分解するか、虚無におちいるか。いずれにしても実際の命からは遊離していきます。

私は高校生の頃人生の問いに目覚めて以来、基本的にはこの方向を一貫して歩

んできたと思います。同じ頃親鸞しんらんに触れ、仏法に触れ、今日までその道を尋ねてきたのですが、本願といい、如来といい、浄土といい、念仏といい、信心といい、何とかしてそれらを分りたいと試みてきたその方向は、前述の知の方向と決して別のものではありませんでした。だから何度問うても、何度聞いても、片方で「本当か知らん」という不信から離れることはできませんでした。

大石先生に出会うまで、私はずっとそうして歩んできました。ところが大石先生に出会い、大石先生が歩んでこられた過程を知ったとき、私は大きな衝撃を受けました。私がたどってきた方向とは全くちがう姿勢で一貫してこられた歩みがそこにあつたからです。それについては、ちょうど一年前の「心光寺からの便り」に書いていますので、その一部を引用してみます。

「これらを通じて知った大石先生の今までの人生の歩みは、わたしにとってほんとうに大きな驚きでした。特に京都大学の法学部を卒業して就職も決まり、結婚相手も決まっていた前途洋洋ぜんとようようの先生が、お母さんの導きで藤解照海とうげしょうかいという一人の僧侶に出会い、その後の人生が一変したいきさつ。その後昭和六十年に藤解先生が亡くなるまでの三十八年間、わき目もふらず一筋に師の導きに従って歩み続けられたこと。これは私にとってほんとうに信じ難いことでした。

私も今まで宗門内外の先生方にだいぶ接しましたが、どの先生方も一方で古今東西の思想に関する関心を持ち続け、たくさんの蔵書を持ち、精力的にそれらを読破しておられます。そういう幅広い思想的な視野の中で親鸞聖人しんらんしょうにんの教えを明らかにしようとされます。ところが大石先生はエリートでありながら、そういう方面に対する色気をきれいさっぱりと捨て去っておられます。また芸術、文化、趣味、風流の方面についての関心もきれいに捨て去っておられます。そしてただひたすら藤解照海とうげしょうかいという無位無官むいむかんの、世間的にはほとんど無名の一僧侶の門下に帰り、ご自分の生涯の全てをこの師一人に投じて、師が亡くなるまでの三十八年間、ただひたすら師の化導けどう(教え導くこと)を受けることに全精力を注ぎ続けられました。」

『心光寺からの便り』平成十三年十月号)

私はそこに前述した知の方向、分かる方向とは全くちがう姿勢を貫き通された一筋の歩みを感じたのです。そしてそのような師の歩みに触れることによって、今まで気づくことのなかった自分の方向性の危険性を知らせていただいたのです。その方向をどこまで突き進んでも、終に堂々めぐりに終わる他ないことを教えていただいたのです。

大石先生はこう語っておられます。

「お師匠様（藤解照海先生）が晩年よく『教え』を大事にしまして申されました。『教えを大事にしましょうで。教えを大事にさせて貰うたら有難い。』凡夫はのう、教えより自分の考えの方を大事にするからのう』このお言葉は大変心に残ったお言葉でしたから、その後しばしばご法座でもきいて頂きました。でも本当は分っておりませんでした。どうしてか。『凡夫は教えを大事にするより自分の考えの方を大事にしておる』それが私だと気づかなかったのです。宗教とはこうあるべきだ。キリスト教では汝の敵を愛せよという。敵と認めるところに愛があるのかと、きいたことを分ったげに話すのは自分の教えを大事にしておるのです。帰命きみよになっておりません。」

（『生まれてよかったですか』八五〜八六頁）

これは大石先生がご自身の歩みを顧みてのお言葉ですが、このようなお言葉によって、大石先生の一貫して歩んでこられた姿勢が逆に鮮明になり、私の立っている姿が照らし出されます。

「教えより自分の考えの方を大事にするからのう」——まさにこれが私のたどってきた方向でした。自分の考えのところに立って、「宗教とはこうあるべきだ。云々」とさも分ったげに語り、考えてきたのは、他ならぬ私だったのです。そういうふうにして、教えに接してきました。つまり自分の方が教えより上に立って、ものを言ったり考えたりしてきたのです。先ほども書いたように、この方向をどこまで推し進めても、脈々として生きるいのちにたどり着くことはありません。

ところがこれと全く逆の姿勢で一貫して歩んでこられた方が大石先生でした。私の場合には主人公である私が教えについてあれこれ考え、理解しようとしてきた

のですが、大石先生の場合はあくまで主人公は教え（師）の方で、先生自身はどこまでもその教え（師）を仰ぎ、教えによって導いていただき、教えを受けていくものという所に徹していかれたのです。

そしてその歩みを推し進めていかれた先にあるのが「白紙になる」というお言葉です。

先生においてその直接の転機となったのは、先月号の『心光寺からの便り』で触れたKさんとの出会いです。すなわちKさんによって、「Kさんを下に見て、私はいつも上位にいる」姿を照らし出されたのです。そのときの内景を先生はご著書の中で次のように語っておられます。

「ここに気づかされて、私は彼の前にびたりと手をつかされました。形ではありません。自分の業の前に手をつかされました。業と一つになったという方が適切かも知りません。このことを知らせて下さるための彼だったのか。三十年にわたる彼との因縁は、私にこのことを教えて下さるための仏様のお手廻しであったのでありますか。私は、そのことから開けて下さった光明の天地を仰ぐ時、人間に生まれたのは、このこと一つをきかせて頂くためであったと、今でも深くお礼申させて頂くだけであります。すべての人の下におろされた時、自分の宿業の前に手をつかされる時、初めて広い広い世界があった。この世を超えた彼方、あなた光明界が拝まれた。」

五頁）

『生まれてよかったですか』二四～二

或いは、

「自分より悪人はおらぬと知らされる所は暗黒です。その暗黒の中にこそ、光明の天地が開けるのです。それは『分りました』という人間の意識を通してうなずくのではない。むしろ、その「我」という意識を消して下さるのです。この光明は『我』という意識を消して下さる。今まで大事にして来た『我』を根底から、迷い、幻影と知らせて下さいます。」

（同 二六頁）

ここで師がはっきり書いて下さっていることは、「我」という意識に救いはないということ。むしろそれは迷いであり、幻影だということ。にもかかわらず私は物心ついて以来、それこそが「私」だと思つて疑わず、外からいろいろな知識や経験を吸収し、蓄積しては、私の主義、主張、考えをいよいよ強固なものにし、他の上に立とうとしてきました。大石先生はそのような方向に救いはないこと。本当の私はそのようなものでないことを、身を以つて明らかにして下さったのです。

大石先生はしばしば、南無阿弥陀仏こそが本当の私だと語って下さいます。

南無阿弥陀仏とは何か。過日心光寺で行われた研修会では、講師の先生（宗正元先生）が、南無阿弥陀仏は凡夫の身に湧き出てくる無量の命だと教えて下さいました。無量の命とは、一切を引き受けて生きる命。「群生を荷負してこれを重担となす」と『大無量寿経』にあるように、喘ぎながら生きる我ら衆生をどこまでも背負い続ける。下ろさずに運命を共にする。そういう命のはたらき。それが南無阿弥陀仏だと。

物心ついて以来の私は、自我というよろい、枠でがっちり固めて、それが「私」だと思ひ込んで疑うこともなく、周囲に対してはただその「私」の満たされることをのみ求めてきました。その結果は明白。どこまで行っても満たされることはありません。

しかし本当はそんなものが「私」ではない。それは迷いであり、幻影に過ぎないものです。本当の「私」とは、南無阿弥陀仏。一切を受け止め、押んでいく命。「群生を荷負してこれを重担となす」命。それこそが本当の「私」だと。

大石先生をはじめとする諸々の念仏の先達者方は、そのことを一心に私に呼びかけて下さいます。それも言葉だけでなく、身を以つてその世界を生きてみせて下さる。そういうかたちで呼びかけて下さいます。

その呼びかけの声が内心に聞こえたとき、私の内から、私もそのような命に生きようと発起してくるものがあります。まさに「念仏申さんと思ひ立つころ」が発起してきます。そこに本当のお前があるではないか。そこに立てど。

その声を聞いた時、物心ついて以来「私」と思ってきたその「私」から、「念仏申さんと思いつくところ」に順したがって行こうとする「私」へと転換する。この転換ということ、大石先生の法話テープを聞かせていただいている最中にふと教えていただきました。それは古い衣を脱ぎ捨てて新しい着物をいただくような喜びでした。

私の心をそのような「南無の心」にしようというのではありません。それは永久にできないことです。そうではなくて、「よきひと（善知識）」を通して呼びかけてくる「南無の心」、それを「たまわった私」としていただくということです。そこに立つ。そこを出発点とする。

「南無の心」に立つといっても、すでに「南無の心」があるのでなければ立ちようがありません。私は長い間、どこにそんな心があるのかと思っておりますが、気が付かないだけで、すでに私のところへ来ているのです。十劫じゅうこくの昔から。

ちようど昨日、思いがけずそのことを教えていただくことができました。それはこういうことです。

家内は毎週木曜日の夜、ご門徒の麻生ちどりさんと二人で輪読会をしています。取り上げる本はいろいろですが、今は、わが子をひき逃げされた苦しみを経て念仏に出遭であわれ、相手と共に助かる世界に目を開かれた北海道の井田ツルさんという方の本を読んでいます。昨日の朝食時のことです。家内が、先日の輪読会の時、「身を拝む」という言葉が出ていて有難かったと言いました。「身を拝む」——その時私はこの言葉に如来様の心を感じて、深く打たれたました。

拝む主体は誰か。それは人間ではないなと思えました。この身を拝んでおられるのは如来様です。身とはそういう深いものを持っているのです。

「群生ぐんじょうを荷負かふしてこれを重担じゅうたんとなす」——これは身が本来持っている深い心を、經典自身が深い三昧さんまい（精神の極めて深い集中の世界）の中から聞き取った言葉に違いないと思います。つまり苦悩の身を決して下ろおさず、最後まで責任をもつて背負い続けるもの。そういう世を超えた深い精神が、身自身に本来宿っているのです。これに対して、私の「思い」はまことに無責任きわまりないものです。

思い通りになることばかりを求めて、思い通りにならないければわが身でさえも嫌い、見捨てていきます。にもかかわらず私は常に「思い」の方に立って、身の方はかえり顧みようとしません。身は余りにも地味で目立たないからです。

しかしそのような身こそ、「南無の心」そのものです。そしてこの身は、出来がいいとか悪いとか、そんな個別の優劣の差違に一切関わりなく、誰もが平等にすでに与えられているのです。そのことに気付いたとき、「わが身を拝む」という心を始めて私にもたまわるのです。

ただ、物心ついて以来わが「思い」でずっと生きてきた私にとって、そのことに気付くことは容易ではありません。そのような私に対して、身に宿る「南無の心」を、「ご自身大変なご苦勞をなさりながら一心に教えて下さるのが「よきひと（善知識）」です。「南無の心」を伝えるために、苦勞をいとわず最期の最期まで歩み続けて下さる「よきひと（善知識）」のご生涯の上に、世を超えた「南無の心」があらわれています。それが私にとっては大石先生でした。いのちの根源からのこの深い呼びかけの声を虚心に聞かせてもらうだけです。そこに私の本当の仕事があります。

ところで伊田ツルさんの本の中で「身を拝む」ということについて書かれている箇所を、先ほど家内から見せてもらいました。最後にそれを掲載して終わりにしたいと思います。

「だからこの身と心が相反するもんね。あいはん心で思う事と身が行じていく事は違う。一緒の場合って無いよね。身が一生懸命行じているのに、私なんてこんな事しなければならんだろうとか、したくないなあとか、いつもぶつくさぶつくさ言ってるのは私の心で、身はそんなこと何も言わないで、黙ってその事を行じてくれている。やっぱりそこに我が身を拝んでいかならんよね。」

『闇も光も』九六〜九七頁

以上、「白紙になる」というお言葉を尋ねていくうちに、思わぬ所へと導かれてきました。このお言葉からはまだまだ多くのことを教えられるのですが、な

かなか思うように書きあらわすことができません。また折にふれて尋ねさせて
いただこうと思います。

今月はお彼岸会で、二日間にわたって大石先生のお話をお聞きすることがで
きます。ぜひ両日ともお参り下さい。また遠くの方や交通の便にご心配の方は、
どうぞ宿泊してご聴聞ちやうもん下さい。こころよりお待ちしています。

南無阿弥陀仏

官岳文隆拜

平成十四年九月七日

摄取山心光寺